



やっぱり・目標と5S

1.孫たちから学ぶ

(1)里山にある学校

二人の孫は宝塚の自然の恵みに溢れた里山の中学校で学んでいます。生徒数は中学校全体で62人、校舎は小学校（児童111名）と認定保育園（園児45名）と同じ所にあり、運動会はこの三者が合同で行います。年齢差は11歳ありますからプログラムは他に比類のない独自性と創造性があります。全員参加のリレーでは走るという運動能力をつけたばかりの3歳児がスタートをきり、アンカーは受験という人生の一つのハードルを背負う中学三年生です。3歳児のお母さんは11年後の我が子を想像して、頼もしく育ててくれと願いながら観戦します。ご両親も地域の人もこのレースが繰り広げるハプニングに人生の来し方、行く末、を思い感無量で観戦します。日頃の過疎地の苦勞を忘れ、心満たされ、心清められ、心はずむ里山の春夏秋冬が満喫できる所です。

(2)吹奏楽部の理念

①孫たち二人は吹奏楽部に入っており、孫娘は3年間ユーフォニアムを、1年生の光棋はトロンボーンを吹いています。部員は各学年6、5、7名計18名の小集団（去年は14名）が今年の目標を県大会出場として懸命な鍛錬をしてきました。参加する中学校のレベルは高く、人数も豊富で多くの補欠選手を抱えていますので、私には無謀な目標としか思えませんでした

②この目標を達成するために顧問の先生（以下リーダーとします）が掲げた理念は、「感動を共に創る～時を守り、場を清め、礼を正す～」ことでした。心が技術を超える！ 厳しい訓練が毎日、土曜日でも日曜日でもなされましたが、理念の実践は具体的です。先ず、「なぜ、整理整頓が大切なのか？」をスタンフォード大学の心理学者、フィリップ・ジンバルド教授の「ブロークンウィンドウズ理論」（添付資料1）をプリントして配布し語る、語ったことは必ず内容を要約してプリントするという徹底した教え方をしました。そして、次のようにコメントを加えています。

「この理論は、日本が昔からなぜ治安が良いのか？を研究したことから生まれたそうです。日本発祥のこの理論をもとに、ニューヨークや中国の大連の治安の回復につながったということは、嬉しいかぎりですね。――中略――トイレのスリッパが全部綺麗に並んでいると、次に入って来た人はきちんと並べようと思うことでしょう。しかし、一つでもそろっ

ていないスリッパがあると、次の人がスリッパをきちんと並べようとするでしょうか？スリッパを揃えないことに対する罪悪感が薄まり、スリッパはどんどん乱れていくことが容易に想像できます。これを、心が荒むと言います（すさむとは、「すさぶ」の音変化——心の持ち方・行動などが乱れてきて、ゆとり、おおらかさがなくなる。とげとげした状態になる。物事の繊細さ・上品さが失われて粗雑になる。）

この他にも＊教室にゴミを落とすこと＊授業中の私語＊服装を乱すこと＊忘れのものをすること＊遅刻をすること。なども同じ事が言えるのではないのでしょうか？集団の中に「守らなくてもまあいいや」という荒みがあると、乱れは止まらなくなります。大切なのは、ひとつも例外を認めないことです。ゼロであるということが「これからもこの状態を保とう」という心を生むのです。最後の一つまで、みなで努力で、荒みを無くしていくことが大切なのです。

吹奏楽部の生徒は、今までも掲示物がはがれていたらセロハンテープで貼り直したり、ゴミを拾ってくれたり、廊下が汚れていたら拭いてくれたり、そんなことを自然とやってくれていました。先週きづいたことですが、帰るときクラスの上履きを全て揃えてくれている生徒もいました。それらもこの荒みを無くするという観点からみても素晴らしいことです。これらのことの価値をあらためて認識し、皆で吹奏楽部を、そして西谷中学校をさらに良いものにしていきましょう」（吹奏楽部通信 第9号より引用）

③これは中学生を指導している先生の考えを文にして部員に配布しています。私がここで再確認したことは「5S には例外を作らないこと」です。大人が陥りやすいのが整頓です。「元に戻す」ことが出来ないために、次の行動に素早く移れないのです。捜し物に時間がかかるのも原因はここにあります。

心が荒むとゆとり、おおらかさがなくなるとはっきり具体的に教えているところは見事です。大人の世界では、ここまで丁寧には教えてくれません。教える方にもこの知識が無いかも知れません。いい仕事をするための環境を自ら作り出している生徒たちは生き生きして気持ちがいいです。学校全体の理念は、「あいさつ」（あ～明るく、い～いつでも、さ～先に、つ～対になって）最後の対になってというところが大人のマニュアルにはありません。この一言は凄い重みを感じました。このことが正門から見えるガラス窓に貼ってあり、いつでも目に見えるようにしてあります。

(3)県大会出場の新賞を獲得

リーダーは少数で勝ち抜くためには、一般的な曲では多勢には及ばないことを知っています。質の勝負では、難曲へのチャレンジしかありません。今年の新賞曲を「道化師」として厳しい特訓を重ねてきました。少人数のため一人が二役をする場面も少なくありません。叱られて悔し涙の毎日に悩んだときもあるようです。勉強時間が少なくなり、成績も芳しくありません。（吹奏楽部はどこの学校も同じように厳しいようです）

リーダーはこのことをよく知っていますが、練習には手を抜きません。後日談でリーダー自ら毎日が命がけであった。手抜きは一切しなかったと語っておられます。

コンクールに向けて、弱みを克服するために心のトレーニングをして、生徒たちの意欲を高めていきます。本番前日のメッセージは理念に戻っています。

コンクールの曲というものは、上手に吹こう、間違えないように吹こうと意識しがちですが、一番大切なことは「聴いている人に感動してもらえよう、そのための練習をしよう」という意識です。「大切な音楽を楽しむこと、楽しんでもらうこと、感動を伝えること」を忘れると本番は怖いものになります。「本当にうまくいった本番は、演奏する喜びに溢れます」人の目や評価、他校の演奏は気になりますが、自分で変えられないものに心を揺らがせず、——略——自分の「今」のみ「今することに全力を注ぐ」（変えられるのは、過去でもなく、未来でもない、今この私だけ）



君たちはよく練習をしてきた。県大会出場の金賞をとれる力はある。目標を達成した「キヤー」とみんなで叫ぼう。マイナス思考は全くありません。弱みを熟知した対策は完了しているとのリーダーの信念が生徒に伝わり実現しました。出場校ではもちろん最小数ですが、指揮者の熱意が生徒、観衆に伝わり、音符は躍動し、隅々に響き渡り、聴衆は我を忘れ、喝采の拍手、プロのコンサートだったら「ブラボー」が飛び出す勢いでした。県大会は力及ばず銅賞でした。よく頑張り、西谷中学校の名前を阪神地区に知らしめ、少数でもこれだけやれるという証を示し、はじめの目標を達成しました。悔いの無い演奏でした。

(4)卒部式:定期演奏会

3年生は定期演奏会で引退します。今年は中学校の体育館で実施され、父兄や近隣の方も沢山参加して盛大な名演奏会となり、後輩からの感謝の言葉、顧問の先生への感謝の言葉みんな苦労しただけあってその分、喜びも大きく感激の涙、涙、涙の光景を私たちも味あうことができました。この小さな里山の学校は地域の人々に毎年多くの感動を与える、そのような指導がなされ、個々への配慮も良くなされ、素直に受け入れられ、実践されおり巷では困っている問題はありません。少数ながら、それ由かもしれませんが、理想的な教育がなされていると感じています。その源は校長先生の明確な理念と現場に自ら入り込んで率先垂範される姿勢が誰の目にも輝いて見えることにあると私は考えています。

ジョン・C・マクスウェルの近著（これからのリーダーが「志すべきこと」を教えよう」を教育現場に当てはめて3つを引用（言葉を換えて）します。

①奉仕の法則;リーダーシップで肝心なのは、生徒たちを「進歩させる」ことである。それには生徒達一人一人の「価値を高める」にはどうすればいいかを考え、奉仕しなければならない。

②成長の法則;優れたリーダーは、毎日、前の日より少しだけ前進することを目指している。リーダーは常に努力を続け、向上心を失わない精神を持たなければならない。

③連帯の法則;リーダーシップを発揮するにはメンバーとの連帯感が必要である。一人一人と関係を築き、つながりを強めなければならない。

その他13の法則が掲げられていますが、私はこれを見て、吹奏楽部の顧問、岡田先生を思い浮かべました。素晴らしい先生です。

2.孫と共に学ぶ

(1)大人の知識

吹奏楽部で活躍していた中学3年生の孫娘もいよいよ高校受験に備えなければなりません。都会では塾。塾の時代にここでは本格的に受験体制に入れるのが11月半ばです。志望校を決めと対策に入り、少しでも能率を上げてやりたいと協力していますが、私の能力は中学2年生で凍結

点位とれる

ユウ

内



は
学校
うです。

ベストピアの

受けていますが、加齢には逆れません。

孫娘に教えてもらいながら、なんとか一緒に学び、目標に向かっていきます。

していることが分かりました。受験問題を見て30
かな！という感じです。国語の長文はボリ
ムがあり、かなりの速読が要求され、

容も社説顔負けの主張があり、短時間
間で理解するには相当訓練をしておかなければなりません。長い
文章をしっかりと理解するには直
近暗記力が必要ですが、この能力が極端に落ちています。時間
がかかり、一日が短く感じられるわけです。

学校が父兄に出す手紙、お知らせ
父兄に外国人が増えている為に 小
3年レベルで書くことになっているそ

文章は小学校3年レベルです。少々ショックを

(2)老いて学べば

「少くして学べば、即ち壮にして為すことあり

壮にして学べば、即ち老いて衰えず

老いて学べば 即ち死して朽ちず」

佐藤一齋の有名な言葉ですが、老いてこの言葉を聞くのは辛いものがあります。若いときに基本をしっかりと学んでおかなければ老いて後悔します。

今、私は日本史、世界史（大学受験用各5冊）を読んでいます。曖昧な歴史の知識ですと何を読んでも時間がかかります。そのことに気づき急がば回れと言い聞かせて曖昧さを無くそうと努力しています。

(3)目標を持てる若さを

根気、集中力、スピードは確実に落ちていきます。どうしようもありません。「それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ」と祈りつつ、変えることのできることと、できないことを識別する知恵を求めています。目標を持つ力は、職場を離れても必要です。他人のためにならないことばかりをしても目標が生き甲斐を与えて方向を示してくれます。目標の本質は達成感ですから、毎日達成感を味わえるような工夫をしています。全てのことから自由になりましたが金銭は不自由になりますから、老いていくことは必然なのです。にもかかわらず、夢をもつ、目標をもつ若さをもとめて生きています。孫達と共に学んで教えられることの一つです。

3 東京駅のドラマ「巧みの業ここにあり」

改築された東京駅ツアーは満員御礼で、私も抽選に外れ実現していませんが、月に5～6度は東京駅のホームに立ちます。そこにも旬の話題があります。「新幹線お掃除の天使たち」という本もでました。私は現役の時にホテルのお掃除、ガソリンスタンドの笑顔について、詳しく学んでいましたので、新幹線のお掃除にも興味をもっています。

特に東北・上越新幹線のダイヤは過密で、行き先が沢山あってどれに乗ればいいのか、何番線か？注意しておかないと乗り違えます。幸い必ず次の上野、大宮に全列車が止まりますので小田原を乗り越して名古屋に行くという悲劇にはなりません、旅慣れた私も外国旅行並みの緊張をしています。

上記の本によりますと、折り返し時間はわずか12分とありますが、実際はもっと短く私の経験では7分というのがありました。降車に2分、乗車に3分かかるので、清掃時間は7分しかない。その間の動きを見るのがとても楽しみなくらいに各車両で7分間の「巧みの業個々に有難うございます。」のドラマが一日1300回東京駅で見られます。グリーン車が見応えがあります。

徹底したマニュアル化と役割分担がなされているのですが、一人二役以上の業が求められます。「巧みの業ここにあり」は、5S（整理、整頓、清掃、清潔、習慣または躰）の集

約があ
って、
すが
すが
しさ、
きび
きび
さ、
ぴか
ぴか
さ、
が相
まって
「日
本人
ここ
にあ



り」を実感しますので、観客は心の中で声援を送っているのです。私の視点は「どれだけ手抜きをしているか？」を見ています。これは攻めるためではありません。定時に到着しない列車は「どこを手抜きするか」しかないのです。

テーブルを開け、拭き、元に戻す作業がありますが、開く作業は手抜きしません。拭く作業、目視で汚れなしと判断した場合は拭きなしで戻す等の判断は5Sにおける重要性の原則なのですが、これは全員には教えません。それほどに重要なことで実は会計原則にもあります。このシステムは車両と共に輸出されていると思います。

私は家で「動くときは何か持っていきなさい」と躰られました。が、「動くときは何か持っていくものがあるかどうか判断して、あれば必ず持って行きなさい」としないと動けなくなってしまうのです。日本人には当たり前の一時二動作です。

一番大変な作業は座席の向きの変更です。東京駅は通過駅ではありませんから、どの列車にも向きの変更が必要です。この時、各席が元に戻っているかどうかのチェックが大変です、1段階の背もたれは見逃すことがあります。そうすると列全体がうまく回転しないのです。強い体力と注意力が同時に要求されます。見ていて気の毒です。

小田急線のロマンスカーには自動的に向きを変えることのできる車両もありますが遅いです。人間の手の方が断然早いです。私は降りるとき必ず席の背を元に戻して次の作業がし易いように配慮していましたが、最近になって車内放送で「ご使用になった席の背は必ず元に戻してください」と呼びかけがあります。一人なら一つを戻すだけですみます。

今月の結論

①5Sの成功要因、例外を作らない。特に整頓において

②段取りが5Sにもう一つのS（スピード）をもたらす。

段取りとは――自己と他者への思いやり。思いやりが成果に結びつく

吹奏楽部通信

第9号

感動を共に創る ～時を守り・場を清め・礼を正す～

なぜ整理整頓が大切なのか？

なぜ、整理整頓が大切なのか。なぜ家で「片付けなさい」といわれるのか。なぜ、学校でも「靴をそろえなさい」といわれるのか。なぜ、部活で「靴をそろえなさい」といわれるのか。そのことの意味、価値を考えましょう。

フロークンウィンドウス理論

この理論の元となったのは、スタンフォード大学の心理学者、フィリップ・ジンバルド教授によって1969年に行なわれた、カリフォルニア州の住宅街に乗用車を放置するという実験である。まず教授は、ナンバープレートを取り外し、ボンネットを開けたままにしたが、1週間は変化がなかったので、フロントガラスを壊してみた。すると、すぐにバッテリーを持ち去られるなど、多くの部品が次々と盗まれてしまった。1週間後には、落書きが書かれ、ほとんどの窓ガラスが割られるなど、車は完全に破壊されてしまった。一体なぜ、このような変化が現れたのか？

ケリング教授によると、「自分だけではない」という意識から罪悪感が薄れ、結果的に乗用車の破壊という大きな被害を引き起こしたと考えられるという。これと同様に落書きは次のような段階を経て凶悪犯罪につながるという。

- ① 落書きが放置されていると小さな行動に対しても罪悪感が薄れやすくなる。
- ② 軽犯罪が多発し、治安が悪くなる。
- ③ この街は、警察の監視がない場所だと判断され、より凶悪な犯罪者が寄り付く。
- ④ 犯罪がエスカレートし、凶悪事件が発生する。

そこで、凶悪犯罪を減少させるには、まず、落書きを徹底的に消して軽犯罪の取り締まりを強化し、小さな犯罪も許さないという姿勢をアピールする。その結果、罪を犯そうとする人は近づかなくなり、凶悪事件は発生しなくなるというのだ。さらに、ケリング教授によれば、犯罪を減少させるには警察だけでなく、行政や住民が道の掃除をする、他人に迷惑をかけていたら注意するといった協力が犯罪を防ぐ大きな力になるというのだ。